

令和 4 年 5 月 17 日現在

機関番号：37502

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00633

研究課題名(和文) 日本語表現史的観点からみた北部九州方言に関する研究

研究課題名(英文) A Study of the Northern Kyushu Dialect from the Historical Perspective of Japanese Expression

研究代表者

森脇 茂秀 (Moriwaki, Shigehide)

別府大学・文学部・教授

研究者番号：40269121

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語表現史を明らかにするという観点から、現在の北部九州の方言と、文献に表れた日本語史とを相対的に考究することによって、新たな日本語の変容過程を明らかにしようとするものである。本研究においては、比喩表現「たとふ」、希望表現「のぞむ」、終助詞「なむ」、アスペクト形式における「静態動詞」「すむ(澄・清)」の意味用法に着目し、それらを考察にすることによって、日本語表現の史的変遷を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本語の機構や構造の史的変遷を明らかにすることを目的としている。また、本研究を行うことによって「相手にいかに伝えるか、いかに訴えるか、その目的のために、言語はいかに駆使(表現の工夫)されるのか、また、その方法として日本語には日本語なりの伝統的な様式と言語形式が培われてきている」ことを明らかにしようとする。さらに、本研究は、「比喩表現」「希望表現」「アスペクト表現」等といった、各々の表現形式の中での、機能や構造を明らかにした上で、表現形式相互が、いかに関連しているのかを考察することによって日本語史を考究しようとするものである。

研究成果の概要(英文)：From the perspective of clarifying the history of Japanese language expression, this study attempts to clarify a new process of transformation of the Japanese language by examining the current dialects of Northern Kyushu relative to the history of the Japanese language as expressed in the literature. In this study, we focused on the usage of the figurative expression "tatofu," the expression of hope "nozomu" and the final particle "namu," the "static verb" and "sumu (澄・清)" in aspectual forms, and by examining them, we were able to clarify the historical transition of Japanese expressions.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語表現史 日本語史 希望表現 比喩表現 アスペクト 方言日本語史

1. 研究開始当初の背景

「日本語史」と「方言学」との有機的帰結として、小林隆(2004)『方言学的日本語史の方法』がある。小林は、奥村(1990)『方言国語史研究』、迫野(1998)『文献方言史研究』の延長上に捉えることの出来る、射程の広い論考である。小林は、「従来の文献重視、中央語主体の歴史記述を見直し、新たな史的研究の可能性を提示する」とし、「方言史を含めた日本語史研究」の重要性を説くが、研究対象となっているのは、「頬」「顔」「ぬか(糠)」「眉毛」等の「基本語彙」による語彙史的研究と、格助詞「へ」、終助詞「け」、副助詞「こそ」、動詞の活用等の文法史研究が柱となっている。

本研究では、「比喩表現」「希望表現」等、総体としての「日本語表現史」を明らかにしようとする立場であるが、奥村、迫野、そして小林の研究は、本研究の羅針盤となるものであり、今後ますます発展的に行わなければならない研究であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、日本語の機構や構造の史的変遷を明らかにすることを目的としている。また、本研究「日本語表現史的観点からみた北部九州方言に関する研究」の「日本語表現」とは、「相手にいかに伝えるか、いかに訴えるか、その目的のために、言語はいかに駆使(表現の工夫)されるのか、また、その方法として日本語には日本語なりの伝統的な様式と言語形式が培われてきている、それをあきらかにし、「日本語の特質を踏まえて、日本語による表現のもつ機構や構造を明らかにしようとする」(糸井通浩(2009))という定義による。また、本研究は、「希望表現」「条件表現」「比喩表現」等といった、各々の表現形式の中での、機能や構造を明らかにした上で、表現形式相互が、いかに関連しているのかを考察することによって日本語史を考究しようとするものである。

3. 研究の方法

本研究での文献による調査による考究は、「実証的研究」と「理論的研究」との整合性を図りながら、文学作品中の用例(実例)から、帰納的で、しかも着実な結論を得るように努める。さらに、東京共通語(標準語)を対象にした現代日本語研究における、助辞(助詞・助動詞)や動詞等の、有益な研究結果を参照することによって、史的考察の結論を得るという点にも特色がある。実際、そのような研究成果は近年発表され、発展の見込まれる方法であるが、本研究では、「日本語史」を複層的に捉えるために、東京共通語を含めた「北部九州」を対象にした現在の方言の研究結果を有機的に取り入れることとする。

4. 研究成果

「希望表現」「比況表現」「アスペクト表現」について考究し、以下のような結論を得た。

(1) 希望表現「のぞむ」考(2018)

動詞「のぞむ」の対象は、「将来そのようになっていくことを期待する「役職」や「社会的役割」であり、それらを実現してほしいと希望することである。また、「のぞむ」は、実際的で、実生活と直接関係する。このことは、動詞「ねがふ」が、「自力では実現・成就がむずかしいため、他力を期待している、こうなってほしいという考え」であり、助辞による希望表現の「詠嘆的希望表現」と極めて近似の性格を有していると捉えることができることは性格を異にすると考えられる。

また、「のぞむ」には、「ある場面に直面すること」という意があるが、それは、「ある場面に直面すること」によって「社会的役割」を失うという用例であり、「社会的役割」を対象にしているという点で希望表現形式と共通していると考えられる。

さらに、「のぞむ」は、副詞句化した「のぞむらく」の用例は、明治期に入るまで見られず、その点動詞「ねがふ」が、「ねがはくは」のように、副詞句化することと相違する。

(2) 比況表現史小考 「たとふ」の意味用法をめぐって (2020)

中古仮名文学作品における「たとふ」の意味用法を考察し、「たとふ」は「しく」「似る」と同じく、対象が格助詞「に」によって示され「にたとふ」形となること、「にたとふ」形は「引用

文、「地の文」、「歌語」すべてに表れること、「何にたとふ+推量」は「歌語」として用いられること、「(よの)たとひ」という名詞形は「会話文」や「心理文」などの「引用文」に表れ、口語的性格のものであったと考えられること等が明らかとなった。また、漢文訓読との関係を指摘されている「たとへば ごとし」は「地の文」に表れること、用例の多い「たとふべき方なし」、「たとへむ方なし」、「たとへんものなし」等の、「たとふ なし」形も専ら「地の文」に表れ、否定辞と共に起る用例が多く、その点で他の比況表現形式「しく」「似る」と用法が類似している等も明らかになった。

(3) 終助詞「なむ」小考(2021)

「文末にあって動詞・助動詞の未然形を受け、ある行動・事態の実現を期待し、あつらえ望む意を表わす」とされる終助詞「なむ」を考察し、次のような結論を得た。

・終助詞「なむ」は、和歌中に用いられる用法が多い。また「なむ」で文が終止しないときは引用節と承接する。

・終助詞「なむ」は、係助詞「は」「も」と共起する。

・和歌中の「なむ」の用法で、「反事実、反過去に主として用いられ、～してくれたらよかったのに、というような意味を表わし、怨念の気持を余情に持つ」があるが、「反事実」や「反過去」は、事実と異なる基準となる時点があり成立する。基準時とは和歌であれば、和歌を詠むとき、心話文であれば、主体の心理(動作)が生ずるときである。

・「なむ」の動作の実現は、人為の及ばないものであることが多い。これは「詠嘆的希望表現」と関連し、比喩表現に用いられる。

・「なむ」は、「とく」「いつしか」「はや(も)」などのような、動作・作用の時間的早さを表す語と共に起る場合には、「主体的希望表現」となる。

(4) 平安時代における「静態動詞」の一形式 動詞「すむ(澄・清)」の意味用法 (2021)

平安時代の仮名文学作品を対象として、動詞「すむ(澄・清)」の意味用法を考察した結果、次のような結果を得た。

・「すむ」単独用法は「和歌」中に限られ、「すむ(澄・清)」に「住む」という意を含めた、所謂「掛詞」として用いられる

・「すむ」は否定語と共に起る用法は少数であり、否定辞と「たり」「り」とは共起しない。

・「すむ」と「たり・り」が共起する用法は、『源氏物語』で57%である。また、「ぬ」と承接した用例が1例ある

・『源氏物語』で「すみて」は「すむ」の約一割である。「似て」が「似る」の3%にしか過ぎず、「すぐれて」が「すぐる」約三割を占める、中間に位置する。

・「たり・り」が共起する用例は「すみたる」「すめる」と連体形のみである。「すむ」は連体修飾用法が重要な機能を担っている。

・「すみたる」は、和歌中に用いられた用例がなく、「すむ」が主節の場合は、「透きとおった状態になる」「はっきりしている」という意を表すが、名詞を修飾する連体修飾節に表れた用例は、人柄や書体、色合いなどが「落ち着いた品格をもつ」という意を表す。

・「すめる」は和歌中に用いられ、「すめる」の被修飾語句が顕在化していない時の主題は「月」「夜」「心」であり、「すめる」が修飾する被修飾語句が顕在化しているものは、「月(影)」「夜」「心地」であって、これらは互いに連関している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 森脇茂秀	4. 巻 60
2. 論文標題 希望表現「のぞむ」考	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 別府大学国語国文学	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森脇茂秀	4. 巻 130-131
2. 論文標題 平安時代における「静態動詞」の一形式 動詞「すむ（澄・清）」の意味用法	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 「語文研究」	6. 最初と最後の頁 35-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4772297	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 筑紫日本語研究会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 518
3. 書名 筑紫語学論叢	

1. 著者名 森脇茂秀	4. 発行年 2020年
2. 出版社 創想社	5. 総ページ数 63-81
3. 書名 坂口至教授退職記念 日本語論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------